

郷土博物館・文学館だより

夏休み体験学習講座 夏休み作品展開催される



「勾玉作り」講座で滑石をヤスリで削る参加者



「土器作り」講座で粘土と格闘中(?)の参加者



「紙すき」講座で紙すきに熱中する参加者

当館では今年の夏休み期間中に、「紙すき」「勾玉作り」「土器作り」の3つの体験学習講座を開催しました。おかげさまで、どの講座も定員を上回る応募があり、当日は親子参加の小・中学生から一般の方まで幅広い参加がありました。制作された作品は、いずれも参加者が創意工夫し、個性的な作品が数多く見られました。

この体験学習講座で制作された作品の一部を、8月15日～9月10日まで、当館1階特別展示室で「夏休み作品展」として展示紹介しました。

制作された作品について個々にみていきますと、ハガキを作った「紙すき」では、ハガキというよりはむしろ額に入れたいような、個性に富んだ作品が多く作られていました。「勾玉作り」では、勾玉にこだわらず、縄文時代の耳かざりからハート形のネックレスまで、様々な作品が並びました。「土器作り」の作品では、土器、土偶のほか、本物と見まちがうばかりの埴輪など、力作もありました。

まだこの講座を体験されていない方、来年はぜひ参加してみてください。

渋谷を走った無軌条電車・トロリーバス

無軌条電車、ちょっと聞きなれないことばかりかもしれませんが、トロリーバスといったら思い当たる人も多いのではないのでしょうか。

トロリーバスは車体の上に、トロリーポール（集電装置）が取り付けられ、架線から電気を取り入れモーターで走りました。

現在、都内で多くの人が利用する交通手段にバスがありますが、このバスが運行されるまでは主に路面電車、都電が利用されていました。この路面電車は、レール（軌条）を敷設しなければ走ることはできません。そのため新しいルートを開設する場合は、時間と費用がかかります。そこで戦後になって採用されたのが、このトロリーバスでした。

トロリーバスは、現在の江戸川区西瑞江にあった今井無軌条電気自動車営業所から上野公園までの約 16km を走ったのがはじまりです（101 系統）。昭和 27 年（1952）5 月 20 日のことです。その後、池袋駅を起点に品川駅（102 系統）や亀戸駅（103 系統）、浅草雷門（104 系統）までの 4 系統が運行されました。

渋谷を走っていたのは 102 系統です。この系統は、まず昭和 30 年 6 月に池袋・千駄ヶ谷間、同年 12 月に千駄ヶ谷・渋谷駅間が開通しました。池袋から現在の明治通りを南下し、渋谷駅東口まで来ると折り返すルートです。翌年 9 月になると、現在の宮下公園付近で右に曲がり、旧渋谷区役所（現電力館）の前を通り、渋谷駅西口から道玄坂をのぼって大橋・中目黒、品川駅まで行くルートが開通しました。さらに昭和 33 年には、渋谷からの乗降がしやすいようにと

宮下公園を一周して戻るルート、旧渋谷区役所前・渋谷駅西口・東口を通り池袋へ戻る、大まわりのループコースに変更されました。

敷設経費が安く、環境にもやさしいトロリーバスですが、問題も抱えていました。それは風雨や積雪に弱く、アースの関係からタイヤにチェーンを巻けなかったり、あるいは踏切りを通過する場合、トロリーポールをはずして補助エンジンで走行しなければならないなどの問題です。そのため交通渋滞を招きました。

やがて燃料の軽油が入手しやすくなってくると、都営交通の再建計画の一環として都電と同様に、トロリーバスは廃止が決定され、バスが運行されるようになります。102 系統はまず昭和 42 年に渋谷・品川間、翌 43 年 3 月 31 日に池袋・渋谷間が廃止されました。トロリーバスは 14 年に満たない短い運行でした。



昭和 33 年頃のトロリーバス（現電力館付近）



常磐松で過ごした「小説の神様」 志賀直哉

渋谷区ゆかりの文学者・志賀直哉は国語の教科書などで学ぶ機会もあり、幅広く知られている小説家の一人です。

明治 16 年 (1883) 2 月 20 日に父・直温 (なおはる)、母・銀の次男として宮城県で生まれましたが、生後まもなく旧相馬藩士だった祖父・直道の住まい、東京市麹町区内幸町に移ります。明治 30 年 (14 歳) に麻布区三河台町に転居し、父との不和を抱えて、大正元年 (1912) に家を出るまで当地に住みました。この間の明治 43 年 4 月に、志賀直哉は学習院の同級生や先輩たちと雑誌『白樺』を創刊します。仲間には武者小路実篤、柳宗悦、有島武郎、有島生馬、里見弴らがいました。また同月には東京帝国大学の『新思潮』、慶應義塾大学の『三田文学』、早稲田大学の『早稲田文学』も発行され、『白樺』を含めて大正文学の口火が切られました。

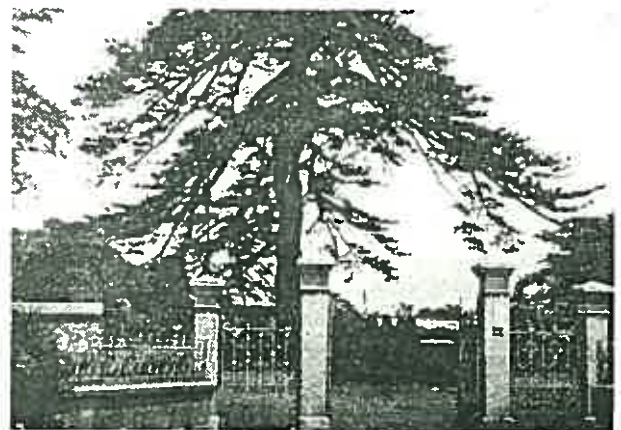
志賀は「網走まで」「剃刀」「大津順吉」「城の崎にて」「小僧の神様」などの作品を発表し、文壇から注目を浴びます。新世代の彼等が一目置いていた文学者・夏目漱石からは、「東京朝日新聞」に小説の連載を薦められたこともありました。尾道、大森、松江、我孫子、京都、奈良、世田谷、熱海など各地を移り住み、代表作『暗夜行路』の完結 (昭和 12 年、1937) や敗戦直後の東京駅と車内を描いた「灰色の月」や、「茶掛けの名品を思わせる」と本多秋伍が評した「山鳩」などを次々と発表します。

昭和 30 年 5 月に建築家・谷口吉郎氏によっ

て、渋谷区の常磐松 (現在の東 1 丁目) に「全く洒落気のない、丈夫で、便利な家…さういう家」(「今度のすまひ」より) が建てられました。渋谷に居住してから半年後の感想では、「便利な事は此上もなく便利で、のれん街のある東横百貨店まで、歩いて七分…」「夜など、品川の海からボウーと汽船の汽笛が聞こえて来るのも却って静かな感じがする。」などと語られています (「熱海と東京」より)。

オリンピック前の常磐松の様子は、昭和 33 年の『常盤松日記』に記述があるほか、昭和 35 年の『渋谷日記』には、映画鑑賞や東横劇場の観劇など日常生活の様子や、常磐松を訪れた武者小路実篤、里見弴、阿川弘之、瀧井孝作、網野菊などの作家たちのことが記されています。

志賀は昭和 46 年 10 月 11 日に 88 歳で亡くなりました。彼の作品には鋭い観察力と簡潔な表現で読者を魅了した短編も数多く、また映画評も彼の人間観察の鋭さを物語っています。



地名の由来となった常盤松 (明治期の写真で、門は御料牧場の門です。昭和 3 年にできた町名は、常盤松の表記となりました。)

田山花袋『東京の三十年』初版本



明治のころまでの渋谷は、田園風景が広がるのどかな場所でした。ここで紹介する田山花袋著『東京の三十年』には、そうした頃の渋谷の様子が描かれています。

『東京の三十年』は、六十二の短編が収められた回想集で、大正六年（一九一七）に博文館から刊行されました。この中の

作品「丘の上の家」には、現在の宇田川町付近に住んでいた国木田独歩を、明治二十九年（一八九六）に花袋が太田玉茗と共に始めて訪れたときのこと

が描かれています。田んぼや畑の中を歩いて夕日のさす丘の上の小さな家を訪れると、突然の訪問にもかかわらず独歩は喜んで迎え入れてくれました。

そして縁側から「渋谷方面の

林だの丘だの水車だのが一目に眺められ」る家で、初対面の彼らは日の暮れるまで話していました。独歩のすすめにより、夕食まで食べた後、花袋と玉茗は月明りの下を「渋谷の停車場の方へ急いで」歩いて帰りました。

ところで、この作品から、独歩の「丘の上の家」は「山路君がさがして呉れた」ことがわかります。「足利尊氏」などの作品を残した評論家の山路愛山は、独歩より少し前に「丘の上の家」の近く「居を移しています。そして一時期を除き、大正六年に亡くなるまで渋谷に住みつづけました。

『東京の三十年』からは、のどかな時代の渋谷とともに、そこで生まれた文学者同士のあたたかい交流をもうかがうことができます。

【今後の展示予定】

特別展「生誕120年記念 折口信夫の世界」

平成18年10月17日（火）～12月17日（日）

*渋谷にも住んだ折口信夫博士の生涯をたどります。

特別展「伝説のつわもの 渋谷金王丸」

平成19年1月16日（火）～3月18日（日）

*伝説の武将「渋谷金王丸」にせまります。

企画展「新収蔵資料展」

平成19年3月27日（火）～4月上旬

*平成18年度に収集した資料を展示紹介します。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ AM9:00～PM5時（入館はPM4:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般100円（80円） 小中学生50円（40円）

※60歳以上の高齢者、障がいのある方は無料

※60歳以上の高齢者、障がいのある方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.3

平成18年10月1日発行